

## 「手裏剣術と私」 第一章 あらすじ

私は、「明府真影流 手裏剣術」の宗家（代表者）である。

明治になって「剣道」や「柔道」などの近代武道が誕生する以前、日本の古流武術は、「武藝十八般」で知られるように、槍や薙刀なども含んだ総合武術であった。

手裏剣術も、古流武術に含まれるれっきとした日本武道の一つなのである。

先代の先生は平成十年に亡くなられたが、私は二代目として正当な手裏剣術を世の中に紹介し、流儀を拡大することに努めてきた。

幸運にも、海外からのテレビ取材、松竹映画「カムイ外伝」での手裏剣術の指導なども飛び込んで、当流儀は国内外で順調に規模を拡大していった。

それにしても、なぜ私はこんなにまで古武術／手裏剣術にひかれるのだろうか？

私は、たまたま知り合ったある霊能者に問いかけてみた。

彼は、私の前世が柳生家の当主として、柳生藩の江戸屋敷に生まれていたからだと言う。不思議にもそれは、私が持っていた古い記憶とも一致するものであった。

彼の言葉をヒントに私は柳生家について調べ、ついに自分の前世を見出すのだった。単に古い記憶だと思っていたが、私は前世の記憶を持っていたのだ。

この不思議な出来事を記録しようと、書き始めたのが、「手裏剣術と私」である。

やがて会社員を辞めて武道家に転身した私は、アメリカとヨーロッパで、手裏剣術の海外セミナーを開催した。

アメリカでは失敗したものの、ヨーロッパでのセミナーは大成功した。

さらに海を渡ったアメリカでもヨーロッパでも、世記憶を持つ人々がいることを知って私は「手裏剣術と私」の内容を大幅に加筆するのだった。

平成二十二年の十一月、私は奈良県の柳生の里を訪ねた。

不幸な最期を遂げた柳生九剣士の墓地を訪ねて、私は彼らによって、自分が導かれていたことを知る。

手裏剣術宗家として活動しつつ、私は前世と今世の関係を知り、世界が人の思いによって、変容していくさまを実体験していたのであった。

こうして「手裏剣術と私」が完結したと思った平成二十三年、あの東日本大震災が起こったのである。（以下第二章につづく）